富岡製糸場総合研究センターだより
No. 18
（2022年8月発行）

富岡製糸場をもっと楽しむための豆知識をお届けします！

工女が身に着けた小倉（こくら）織の男袴

西置繭所（にしおきまゆじょ）のギャラリー中央に、女子作業服のミニチュアが展示されています。一番左端の作業服は、この工場が始まったころのものです。官営期の工女は、このような着物に男袴（男性用の馬乗り袴）の支度で仕事に向かいました。

1873（明治6）年6月に東京から皇后と皇太后が行啓された際には、工場から揃いの着物が支給されたようです。「工女一同紺かすりの仕着（しき）せと小倉赤縞の袴が渡りました」との、工女の回想録もあります。

専門家の監修のもと2分の1スケールで復元したミニチュアの袴の生地にも小倉織を採用しています。

小倉織は九州の小倉地方（現在の北九州市の一部）で織られていた綿織物です。経糸（たていと）を密にした地厚で丈夫な織物は、江戸時代には日常の袴地・男帯などに使われていました。この生地は重宝され、小倉織の名称で産地は全国各地に広まりました。小倉織は、明治に入り軍隊の制服などに採用され、時代を経て学生服にも使われていきます。

やがて、女性が男袴をつけて仕事をすることはなくなります。当時は奇異ともとられるこのスタイルを、堂々と着こなしていた彼女たちの心持はどんなものだったのでしょうか。

◆発行◆
富岡市世界遺産観光部　富岡製糸場総合研究センター